様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００６１

研究課題名（和文）インド・ヴリンダーヴァンのチャイタニヤ派における理論と実践の相互補完的研究

研究課題名（英文）Mutually Complementary Research between Theory and Practice into the Caitanya School of Vrindavan

研究代表者
橋本　泰元（Hashimoto, Taigen）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：４０２５６７６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、ヴリンダーヴァンのチャイタニヤ派をモデルケースとして、バクティ研究における理論と実践との相互補完的な研究方法の実例を提示することである。理論分野においては『バクティ・ラサームリタ・スィンドゥ』や『バーガヴァタ・プラーナ』などの翻訳、分析など、実践分野においてはヴリンダーヴァンの主要寺院のひとつラーダーラマン寺院の調査を行った。現地調査の制約により、理論と実践を十分に結びつけることができなかったが、研究協力体制の促進につながり、これを継続・維持していくことにより、理論と実践が連動した「綜合研究としてのバクティ研究」のモデルケースとして発展させることができるであろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、インド学研究における宗教、哲学、文学、美術、社会、歴史などの様々な領域をつなげる際の軸として、バクティという民衆的宗教運動を挙げる点である。また、複数の研究者が協力して行うことは、学際的な観点からみれば、目新しいものではないが、人文学研究の分野では個々の独立性が強く、特に本邦の南アジア研究においては、中世を境に、古代哲学・思想を中心とした文献学的研究とフィールドワークを中心とした共時的かつ実践的な文化人類学的研究とに分断されてしまっている傾向がある現状に対し、両者の研究協力体制の促進にも繋がるものと考える。

研究成果の概要（英文）：It is the purpose of this study to present an example of mutually complementary research methods between theory and practice into Bhakti studies, using Chaitanya school of Vrindavan as a case study. In the theoretical approach, we translated and analyzed the Bhakti Rasamrta Sindhu and the Bhagavata Purana, while in the practical approach, we conducted a field study of the Radha Raman temple, one of Vrindavan's major temples. Although we were unable to fully link theory and practice due to the limitations of field research, the project has led to the promotion of a research cooperation. If continued and maintained, this cooperation can be developed as a model case of “Bhakti research as an integrated study” in which theory and practice are intertwined.

研究分野：人文・社会 / 中国哲学、印度哲学、仏教学 / インド学

キーワード：バクティ　ヴリンダーヴァン　チャイタニヤ　クリシュナ　バーガヴァタ・プラーナ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

ヒンドゥー教の思想において、神への献身・信愛を意味するバクティという概念は、中心的な思想の一つであり、２つの方向性、一元論的な立場に基づく同一性を説く理論的方向性と救済論における実践的方向性としてとらえられている。そのため、バクティ研究においては、理論と実践という双方向性を抜きには語れないが、研究上でそれを実現するには困難である。そこで、複数の研究者がそれぞれの立場から互いにフィードバックを受け取ることにより、より具体的で精緻な研究が可能となる。

２．研究の目的

本研究の目的は、ヴリンダーヴァンのチャイタニヤ派をモデルケースとして、バクティ研究における双方向性に基づく多数の研究を連携させ、理論と実践との相互補完的な研究方法の実例を提示することである。さらには、個々の独立性が強く、中世を境に、古代哲学・思想を中心とした文献学的研究とフィールドワークを中心とした共時的かつ実践的な文化人類学的研究とに分断されてしまっている傾向が強い本邦の南アジア研究の状況に対し、古代～中世～近代へと綿々と受け継がれてきた思想的・文化的流動の解明に寄与でき、両者の研究協力体制の促進にも繋がるものと考える。

３．研究の方法

本研究は、インド学研究における宗教、哲学、文学、美術、社会、歴史などの様々な領域をつなげる際の軸として、バクティという民衆的宗教運動を挙げ、思想・文化を一定の静的な現象として捉えるのではなく、多様で動的な潮流として捉える視点に基づいている。そこで、理論分野は文献研究からのアプローチを行い、古代思想からの影響関係を探る。実践分野はヴリンダーヴァンでの実地調査を中心とした事例研究を行う。それらをチャイタニヤ神学の研究と実態調査に基づいた研究を繋げていくことにより、各研究を連動させていく。さらに、理論と実践の連動した研究の具体例として、宗教美術を取り上げ、バクティにおける文化的な影響の側面を補強する。以上の研究を、理論と実践が連動した「綜合研究としてのバクティ研究」のモデルケースとして提示する。

４．研究成果

共通の基礎研究として、『バーガヴァタ・プラーナ』10 巻「クリシュナ神話」のヒンディー語翻案である『プレーム・サーガル』の翻訳研究および先行論文の検討会を行った。『プレーム・サーガル』は近代以降のインドにおいて民衆におけるクリシュナ伝承のイメージ形成に大きな影響を与えたと考えられるが、本邦では本格的な翻訳分析はほとんどなされていない。ストーリーは細部まで原本に忠実であるが、時折、原本と異なり過度なクリシュナ賛美や登場人物の神格化が見られることや冗長な改変がなされていることが明らかになった。またマスケット銃が登場するなどの近代的なアレンジやヴィシュヌ派の宇宙生成論に説かれるクリシュナとその兄、息子、孫の 4 人の神格から形成されるヴューハ説と、叙事詩『ラーマーヤナ』に登場する主人公ラーマとその 3 人の弟と同一視しているなど、独自の説も見出された。また、クリシュナ信仰における甘美な愛情を表現するラーサの踊りについても詳細に描写されていることが明らかになった。また、先行研究の検討会では Srivatsa Gosvami の論文 Radha: The play and Perfection of Rasa を取り上げ、その内容検討を行った。ヴリンダーヴァンのチャイタニヤ派の導師である Srivatsa Gosvami の論文には同派の理論が反映されており、クリシュナの愛人であるラーダーの重要性、神への信愛における美的体験ラサと官能的な恋愛への結びつけが読み取れた。

理論分野においては研究対象文献である神学書『バクティ・ラサームリタ・スィンドゥ（「バクティの情趣の甘露の海」）』や『バーガヴァタ・プラーナ』などの翻訳、分析などを行った。チャイタニヤの様々な伝記を調査して、チャイタニヤがクリシュナ神に対して「示現」を希求し、クリシュナ神との自己の「別離」の情感を持ち続ける神秘的なバクティ思想を、チャイタニヤはマーアヴェーンドラ・プリーから直接受け継ぎ、マーアヴェーンドラ・プリーはその資源を南インドのクリシュナ・バクティを謳いあげるサンスクリット語詩文学から形式的にも内容的にも得ていることを明らかにした。これによって、北インドのベンガル地方で発生したチャイタニヤ派のバクティ思想と南インドで盛んになったバクティ思想の動態の一端が明らかになったと言えよう。また、『バーガヴァタ・プラーナ』における宇宙生成論の研究について進め、ヒンドゥー教ヴィシュヌ派の一派であるパーンチャラートラ派に特徴的なヴューハ説の影響が見られ、

さらにここではインド六派哲学の一つサーンキヤ学派の思想が取り入れられた宇宙生成論が説かれているが、最高神ヴィシュヌを頂点とする一元論に合わせて改変されており、様々な説を折衷・融合させ、一元論的理論にまとめあげるヒンドゥー教宇宙生成論の特徴が継承されており、教義形成への影響の一端を解明できたと言えよう。

実践分野においては研究対象地ヴリンダーヴァンの調査が、新型コロナウィルス感染拡大の影響によりほとんど行えず、過去の調査や現在 Web 上で得られる情報などに基づき、現在の様子が明らかにし、また、寡婦たちへの聞き取りも行えなかったために、寡婦たちの考え方に深い影響を与えているパティヴラター（夫に対する妻の貞節さを意味する）の定義の明確化を、女神崇拝を通じて行うなどの研究を進めた。新型コロナ収束後の 2023 年 2 月に調査が可能となり、ウッタル・プラデーシュ州ヴリンダーヴァンに所在するチャイタニヤ派の主要寺院のひとつラーダーラマン寺院の組織運営と聖職者の活動について約 2 週間の現地研究を行い、聖職者 2 名と信徒数名への聞き取り調査、法話の参与観察と記録の実施を行った。その結果、研究対象のラーダーラマン寺院に関するこれまでの報告と異なり、この寺院を管理する家系の増減による変化や、ヴリンダーヴァンにある同じ「チャイタニヤ派」の大寺院との間には宗派的な結びつきがないなどの新たな事実が判明し、バラモンによる講話と音楽を媒体とした宗教的な娯楽要素も含んだ催しであるカターが、一般信徒である聴衆にとって神話や教義にふれることができる機会となっているだけでなく、同時にカターの語り手にとって各地に住む弟子との交流、新たな弟子の獲得、そして収入を得る重要な機会ともなっていることを明らかにした。さらには、最終年度の 2023 年 9 月に実地調査を行った。調査では、研究対象であるラーダーラマン寺院を始め、クリシュナ信仰関連の聖地を視察し、伝統的な寺院のみならず新たな宗教施設や参拝客などの増加といった傾向が確認できた。さらに、9 月 7 日、ラーダーラマン寺院において、クリシュナ生誕祭を参与・観察した。多くの人々による熱狂的な崇拝が行われ、開祖チャイタニヤが歌い踊りながら参拝していたというその伝承を引き継ぐ人々の様子が確認できた。また、現在ラーダーラマン寺院を管理するブラーフマン（バラモン）の聖職者の一家族が住むジャイスィング・ゲーラーにて、チャイタニヤ派僧のアビナヴ師と、同じくチャイタニヤ派僧であり、本研究に協力いただいているシュリーヴァッツ・ゴースワミー師と対談を行った。

一方、バクティの文化的な側面として、詩人ジャヤデーヴァによってクリシュナとラーダーの恋が謳い上げられた抒情詩『ギータ・ゴーヴィンダ』の細密画（ラージプート画の一派メーワール派、Government Museum Udaipur 所蔵のテクスト付き細密画）を取り上げ、細密画の題材となったテクストと細密画の関係性について分析を行い、それを通じて美的体験ラサ理論の解明を試みた。画家は、詩節の内容をただ描いているだけでなく、クリシュナとラーダーの別離の様子の精緻な描写を通じて、文学的ラサの表現を絵画上で実現し、さらにはバクティの主要要素である別離までをも表現していることが明らかとなった。

このような複数の研究を行い、それらの研究をバクティを中核とすることにより結びつけ、理論と実践の相互補完的な研究を目指してきた。しかし、当初の意図していたとおりに現地調査が行えなかったために、調査結果の十分な分析ができず、結果、双方の研究を十分に結びつけることができなかった。しかしながら、もう一つの目的であった文献学的研究と文化人類学的研究との研究協力体制の促進の一助にはなったと考えられる。今後は、本研究により深められた研究協力体制を継続・維持していくことが必要であり、それこそが理論と実践が連動した「綜合研究としてのバクティ研究」のモデルケースとなるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 三澤祐嗣	４．巻 60
２．論文標題 『ラクシュミー・タントラ』第5章訳註（3)―感覚器官の出現と分類―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東洋学研究	６．最初と最後の頁 159--170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本泰元	４．巻 59号
２．論文標題 チャイタニヤのバクティ思想の背景―南インドのバクティ運動との関連において―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東洋学研究	６．最初と最後の頁 pp.119-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 橋本泰元	４．巻 58
２．論文標題 スィク教聖典におけるスーフィー詩人ファリード―異宗教間の対話	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東洋学研究	６．最初と最後の頁 57-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 相川愛美	４．巻 58
２．論文標題 求められるパティヴラター（妻の夫に対する貞節さ）とその実態―ラーニー・サティー女神崇拝を事例として―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東洋学研究	６．最初と最後の頁 97-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三澤博枝	4．巻 58
2．論文標題 細密画における嫌悪のラサについて－ウダイプル博物館所蔵メーワール派『ギータ・ゴーヴィンダ』Folio10を例にして	5．発行年 2022年
3．雑誌名 東洋大学大学院紀要	6．最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三澤 博枝	4．巻 60
2．論文標題 メーワール派細密画『ギータ・ゴーヴィンダ』 Folio 23 に見られる意匠	5．発行年 2023年
3．雑誌名 東洋学研究	6．最初と最後の頁 197-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34428/0002000503	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 沼田一郎	4．巻 11
2．論文標題 『マハーバーラタ』第12巻「ラージャダルマ章」訳注（２）	5．発行年 2024年
3．雑誌名 東洋思想文化	6．最初と最後の頁 103-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 澤田彰宏
2．発表標題 インドの宗教的語り芸カターについて－チャイタニヤ派寺院のゴースワーミー師の事例から－
3．学会等名 東洋大学東洋学研究所第3回オンライン研究発表例会
4．発表年 2021年

１．発表者名 澤田彰宏
２．発表標題 ヒンドゥー教チャイタニヤ派の寺院の組織と運営――北インドのヴリンダーヴァンでの調査から――
３．学会等名 令和二年度中村元東方研究所新春研究発表会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 澤田彰宏
２．発表標題 ヒンドゥー教の法話バーガヴァタ・カター ――ヴリンダーヴァンのチャイタニヤ派ゴースワーミー師の事例から――
３．学会等名 東洋大学東洋学研究所2023年度第4回研究発表例会（オンライン）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	沼田　一郎 (Numata Ichiro) (20261258)	東洋大学・文学部・教授 (32663)	
研究分担者	澤田　彰宏 (Sawada Akihiro) (00645939)	東洋大学・東洋学研究所・客員研究員 (32663)	
研究分担者	三澤　祐嗣 (Misawa Yuji) (00755259)	東洋大学・東洋学研究所・客員研究員 (32663)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	相川　愛美 (Aikawa Emi) (60813582)	東洋大学・東洋学研究所・客員研究員 (32663)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	三澤　博枝 (Misawa Hiroe)	東洋大学・東洋学研究所・客員研究員 (32663)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関